[サリュ]

フランス語で〈救い〉の意。

Salut

人が集まる。いのち弾ける。

シアトリカル

應典院

平成9年、スタート。

発刊のごあいさつ

文化のお寺應典院の再建は、なにわの名刹大蓮寺が創建440周年記念事業として着手するものです。大蓮寺は、多くの文人や教育家、また芸能家とも縁の深い、文教の寺院。應典院はその伝統を踏まえ、地域に開かれた、まったく新しい都市型寺院として平成9年に竣工します。

その構想は、劇場型の本堂を有し、あらゆる世代を対象としたさまざまな研修やイベントを開催、新しいこころのエネルギーを放つ、文化創造の拠点づくりといえます。もちろん劇場機能も装備し、演劇やアートなどの自主公演なども計画、まさに都市の異界として、多くの注目を集めることでしょう。

そして、すべての根本に流れる大乗仏教のみ教え――大慈悲―救い、を、いまという時代に伝えるため、應典院は永劫に一心に精進を重ねる所存です。

本誌は、應典院の実現に向け、すでにスタートしている多くの教化・教育事業、またそれに加え同寺のプロデューサーとして活躍する秋田光彦住職の活躍ぶりをお伝えするものです。当面、夏と冬の年2回の刊行を予定しておりますので、どうか末永いご愛読をお願い申し上げます。

應典院再建委員会代表　秋田　光茂

文化のお寺〈應典院〉のニューズレター

2

1995●WINTER●VOL.2

発行■應典院再建委員会
編集■サリュ編集部

INFORMATION

国際協力・平和の誓い 故中田厚仁氏の墓参に要人

既報の通り、大蓮寺檀信徒・国連ボランティア名誉大使中田武仁さんの講演が行われましたが、今秋には国際的な要人が続々故厚仁さんの墓前を訪問、テレビ・新聞などでも報道され、平和の誓いを新たにしました。

10月9日には、広島アジア大会に初参加で話題を集めたカンボジア・オリンピック委員会副委員長ミー・サムディさんが来山。お国では副首相格の要人ですが、墓前ではアジア式礼拝を行うなど、仏教徒らしいところを感じました。

また11月11日には、国連総合ボランティア計画事務局長のブレンダ・マックスウィーニーさんが参詣。生前の厚仁さんと面識のあるマックスウィニーさんは、国連カラーである青と白のカーネーションを墓前に供え、黙祷をささげました。

第6回LCS M.エンデの世界を語り合う

来る1月24日、蓮美文化研究所の主催する、第6回ロータスカルチャーサロンに、埼玉大学教授安達忠夫先生をお招きし、ファンタジー作家ミヒャエル・エンデについて、お話しいただきます。10時～さんがホールにて。

エンデは、「モモ」「鏡の中のわたし」などで知られる西ドイツの児童文学作家ですが、その作風は「こころ」や「癒し」「信仰」といった文脈に貫かれています。

安達先生は、独文学がご専門で、エンデやアンデルセンなど、寓話作家を中心にご研究をされており、この11月にデンマーク留学から帰国されたばかり。蓮文研のセラピー教室「こころの教室」でも、お母さんたちが永く「モモ」をテキストに勉強してきたこともあり、当日は講演プラス先生を囲んで、自在に語り合う時間を用意しました。

エンデがわたしたちに伝えたいこと、また現代におけるファンタジーの意味など、ともに学びあいたいと思います。

ふたたびベトナムSTへ 2月下旬のツァーの参加者募集中

NGOのアーユス関西では、再びベトナムのスタディツァーを来月下旬に準備中、平成7年1月早々に日程等詳細が決定されます。

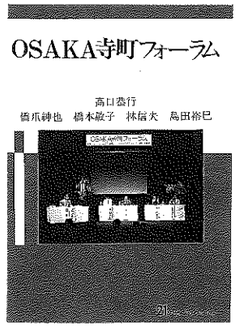
既報の通り、アーユス関西では、ハノイ近在のキンバン村を継続的に支援していますが、今回はその実地の視察・取材を目的としたツァー。その他、ホーチミン市のNGO＝CIDSEの視察や観光も含め、同市3泊、ハノイ2泊、キンバン1泊の計6泊の旅程となっています。ベトナムには永くかかわってこられた豊中国際交流協会事務局長の雨森孝悦さんを団長に、秋田師も再び同行、本格的な交流の準備に入ります。

この号が出る頃には詳細の内容が決まっていますので、ツァー参加希望者は至急ご照会ください。

OSAKA寺町フォーラム ブックレット刊行なる

昨年7月6日に開催され、「都市と寺町」「都市と仏教」という魅力的なテキストを提案した、＜OSAKA寺町フォーラム＞。このイベントの全容が、一冊のブックレットにまとめられ、教化情報センター21の会から発刊となりました。建築家・一心寺住職高口恭行師や日本女子大学助教授島田裕巳氏、京都精華大学講師橋爪紳也氏など、若手研究者の発言がたいへん刺激的な好著です。

一冊800円（〒240円）。購読希望は應典院までFAXかお電話でお申込みください（写真）。



遅まきながら、現代教化ファイル 第3弾「寺院経済」も刊行

やはり21の会の出版で、毎号刺激的な切り口で、宗内をあっと言わせる、教化（カルト？）誌「現代教化ファイル」の第3号が、ようやく昨年12月に出版の運びとなりました。

こちらの方は、遅々とした速度の発行態勢で、年2回刊が事実上年刊となってしまい、発行人の秋田師としては、面目ないところ。申し訳ない限りです。

わずか70頁ほどの小誌ながら、今回はタブー視される「寺院経済問題」に切り込み、現代布施論を展開、ライター高橋繁行氏のインタビュー・ルポや若手経済学者による「首都圏寺院の経済解析」など読ませます。恒例のアンケート特集では在家も研究者も能化もカンカンガクガクの応酬で、これまた一読の価値あり。

今号より単品購読が可能（2800円）となりましたが、出版運動体でありますので、できたら年間購読（5000円）していただきたいです。購読お申込みは、應典院まで。

総幼研のテレビスポット 1月よりCSで初登場

パドマ幼稚園が中心の総合幼児教育研究会（総幼研）の、初めてのテレビスポットが、1月からテレビでオンエアされます。

CS及びケーブルテレビで70万世帯で視聴される子ども専門チャンネル「キッズ・ステーション」がそれ。同チャンネルで初の幼児教育番組「リトミカひろば」の放送中、総幼研の幼稚園・保育園の活動ぶりが30秒スポットで紹介されます。番組監修の玉野良雄先生のご縁で、製作の大日本印刷、提供のINA保険との間でタイアップが決まり、6月まで半年間、連日放映されます。

素材は8㎜ビデオで自主撮影というマイナーものですが、新しいメディアのジョイントに、事務局担当の秋田師としても、大いにはりきるところです。

きみはそのままでいいのだから。南の国で感じた、應典院センシティブ。

應典院住職　秋田光彦師に聞く。

風の吹き抜ける場所

去年の十月二十八日、トークイベント「ぼくたちの應典院を語ろう」を開催、檀家さんを含め約六十名の参加で賑わいました（9頁に報告）。建築を担当していただく高口恭行先生をはじめ、NGOやら芸能やら各界ごっちゃなゲストを招き、應典院に対する夢をしゃべってもらったわけですが、ぼくはずっと会場の後方からこれを眺めていて、幸せな予感を感じていました。

会場の大蓮寺の客殿は、総檜造りの純日本建築。ふだんは法事だとかお寺の会合に使用される場所ですが、この日集まったゲストやお客は、あまり座布団には座り慣れない世代の人たちが中心で、窮屈そうな、それでいてもの珍しげな雰囲気が、このイベントをとてもよく象徴していました。

近寄りがたいが、親しめる。ほっとしながら緊張している。場所だけではありません。いちばんうれしかったのは、檀家さんと若いゲストたちが向かい合ったこと。つまり、應典院が、はっきり人の息になって聞こえた、これは初めての夜でもあったわけです。両者のお見合いは、何か実体めいたものを表してくれたでしょうか。

「秋田さん、應典院を風の吹き抜ける場所にしてください」と、ゲストの有田亜李子さん（劇団維新派）。

終演後のアンケートには、ある檀家さんの声が、こう書かれていました。

「…言いたい放題で終わってしまわず、これから何回か続けて多くの切り口を出した上で何らかの方向づけをしていくことがたいせつ。この種のトークの積み重ねの中から、やはり固定観念から突出したものが得られればよいのでは…」

そや！がんばらなあかん。

今のまま生きていていいんだよ

この前の秋、ベトナムに行ってきました。その時のビッグなお土産が、今号特集の「チャオ！　ベトナム」ですが、約一週間の旅は刺激と驚きの連続でした。

日本のマスコミが伝える「着々と経済発展を遂げるベトナム」というイメージは早々に覆され、NGOのスタディツァーで見た現実は、南の人の素朴さと、そして貧しさでした。まだ外国人が珍しくて、視線に晒されながら、道中、貧農といわれる人々や、路上生活者やしがない物売りなどとふれて折々に感じたことは、その貧しさとは裏腹の、現在を肯定する充足感でした。貧しいことが、悲惨であったり、困難でない。「今のまま生きていていいんだよ」という、数多い励ましの声でした。

楠原彰先生（国学院大）はある講演で、こんなことを語ってくれました。

「私が南の人から学んだことは、今は明日の途中ではない、今は今であるということ。また、君もいまの君のままでいいという、ひとりの人間の全部を受け入れる、承認のネットワークが、南の国の哲学なんだ」

親しみと愛着と、なつかしさと――ベトナムに対する諸々の感情の底には、ぼくたちの　今についての激しい問いなおしが込められているように思います。

ともかくも、アーユス関西（＝仏教国際協力ネットワーク）も本格胎動、しばらくはハノイ近在のキンバンという村をいろんな形で支援していくことになりそうです。

個人と向き合う寺院文化を

宗教モノには定評ある毎日新聞が、この十一月に大型企画で「戦後五十年ニッポン診断書・安らぎのありか」を長期連載、創価学会の政界進出や幸福の科学のその後、はたまた前世体験や霊界ランドまで、この国の宗教事情を手際よくまとめていました。

應典院のこともチラッと紹介されましたが、いつもこの手の報道で痛感するのは、結局宗教の今日的モチーフを探っていくと、悉く新しい宗教に行き着く、ということ。よくも悪くも、現実の脱構築をはかる数々の試行錯誤が、ある意味で、既成の宗教にはないラジカルな魅力を生むのでしょう。まさに実践の凄味だし、現実の闘いがそこにある。

では、翻って既成宗教はどうか、といいますと、あがってくる話題はやれ「水子供養」だの「葬式仏教」だの、見えてくるのは死後の計らいばかりで、その論調は、早や死に体の様相を呈しています。そこには、今に対するこだわりや葛藤がない、だから魅力もないということでしょうか。

ぼくは、もちろん既成の仏教にパワーがないなんて思いません。ひとつには、教団のPR不足もありましょうが、これとて本願寺の蓮如キャンペーンみたいな物量によれば、達成できるというものではない。そんなことより、もっと深刻な問題は、この仏教の教えが今を生きている個人個人に果して届いているのだろうか、いや、（伝道者である）ぼくたちが、それを届けられているのだろうかという重大な自問です。

とてもここでは書き尽くせませんが、應典院の試みも、また同じ問いかけから始まっています。いわゆる仏事を中心とせず、違う角度から寺院の文化を創造し、個人と向き合っていく。世俗という大きな鍋蓋を、弾ける豆の力で、少しずつ動かしていく。多くの便法を動員しながら、ぼくなりに浄土の運動を、実践していきたいと願っています。

應典院、第二章のはじまり

今年、平成七年は應典院にとって、縫合でいうと仮縫いの一年になります。生地やスタイルを決め、着る人の人柄や個性も映しとっていく時期です。

従って、まずは似合いの建築を目標にしなくてはならない。豪勢である必要はないけれど、新しい都市の知性を象徴するような、魅力的な相貌を描かなくてはならない。部屋がいくつあって、間取りはどうなっていて、なんて機能上のことも、次第に固まっていきます。建築家・高口恭行先生（一心寺住職）のすばらしい手腕に、ここしばらくはお預けした状態です。

その間、ぼくは色やデザインをしっかり決め込んでいきます。そもそも應典院とは何なのか。お寺として何を行い、何を育てていこうとしているのか、それに対するリアルな回答の一部が、今年のぼくたちの活動です。

試行錯誤を重ねつつ、應典院としての経験を重ねていく。まるで仮縫いのスーツの上から、スプレーで色塗りしていくような、そんな試みも面白いのでは。

ともかくも、應典院第二章の始まりです。今年もよろしく応援してください。合掌



ベトナム・キンバン村で代表のスピーチ（1994/10/6）

TALK&TALK

チャオ！ ベトナム 世界と「縁」によって支えあう。

——お寺はかつてNGOだった

お寺はかつてNGOだった。NGOつまり非政府の組織。政府や行政の管理が及ばない場所、人間の自由が確認できる場所、それがかつての寺院だった。—と、こう語ってくれたのは、應典院住職・秋田光彦師です。

秋田師が「かつて」と言う時、必ずそこには「これからの」という思いがこめられています。かつてお寺は寺子屋だった。かつてお寺は劇場だった……。

本来の機能を取り戻し「かつて」の姿に再生すること、それが「これからの」寺院に求められているのだと、秋田師は日頃から熱く語り、かつ行動してきました。こうした脈絡で秋田師が企画し実現してきたさまざまなイベントは、「再生」の一大プロジェクト＝應典院再建に向けた一連のプレ・イベントと見なすこともできます。

その秋田師が今、「お寺はかつてNGOだった」と語ります。お寺が本来持っていた機能を、「NGO」という言い方でたとえてみせます。秋田師の言うように、本来「管理の及ばない」非政府的な場所だったお寺は、それと同時に、あるいはそれゆえに、生活エリアの情報を集約し発信する拠点でもありました。人々が集いなごむ空間でもありました。つまり、地域共同体を「組織」化する場としての役割を担っていたのです。

そうした意味でお寺とは、なるほどNGOにたとえることができるでしょう。NGOもまた、市民のネットワークを確実に形成し活用することによって成り立つ組織形態だからです。ですがもちろん、お寺をNGOだというのは、これは単なる比喩ではありません。

今、僧侶たちのNGO

というのも現実に多くの僧侶が、現在、NGO活動にたずさわっているのです。ここで言うNGOとは「貧困、飢餓、難民、環境など地球規模の問題に、非政府・非営利の立場から取り組む市民団体」のことです。一般に認識されている通りのNGOのことであり、それは寺院や僧侶のありようの単なる比喩ではありません。

彼ら僧侶たちはNGOを菩薩行だと言い、仏教者の使命として取り組んでいると言います。秋田師もその一人です。だから秋田師が「お寺はかつてNGOだった」と言う時、そこには前述のような「管理からの自由空間」という比喩的意味合いも含まれてはいますが、同時にはっきりと、文字通りNGOの拠点としての寺院をも視野に入れているのです。

ここに僧侶たちが運営する一つのNGOがあります。『アーユス』＝仏教国際協力ネットワーク。一九九三年発足。秋田師もメンバーに名を連ねています。アーユスとはサンスクリット語で「いのち」の意味。僧侶たちの手になる「いのち」という名のNGO、それは「地球は生かされ生かし合う縁起の世界」という思いを旨としつつ、おもに途上国に対する開発支援や、連携する他のNGOに対する人的支援などをおこなっています。



NGOをめぐるトーク

十一月四日、この『アーユス』の主催（正確には関西地区会員の会『アーユス関西』の主催）で、「チャオ・ベトナム」と題するトーク・イベントが催されました。会場は、秋田師が副住職を務める大蓮寺です。

ベトナムは、現在『アーユス』のNGO活動が具体的に展開されている国です。キンバンという地区で青年の技術訓練及び基盤作りのための国際協力）南部ベトナム駐在代表で、労働者対象の小規模金融のプログラマーです。氏とベトナムとの関わりは、FAO（国連農業基金）からベトナムでの貸付プログラム指導を要請されたのがきっかけです。女性を組織化し金融機関と結びつけるという課題の達成過程でタン女史に出会い、「貧しい女性に無担保で金を貸す金融システムを作りたい」という点で意気投合し、CIDSE現地駐在として働くことを決意したといいます。

雨森孝悦氏。とよなか国際交流協会事務局長です。ACT（アジア・コミュニティ・トラスト）のメンバーだった頃、友人のアリップ氏と共にベトナムへ行き、タン女史に会いました。無担保貸付を実現するためのプロジェクトは、ベトナム・フィリピン・日本の友情に支えられ、TYM（アイ・ラブ・ユーのベトナム語の略）と名付けられました。氏は『アーユス』専門委員も務め、この日のトーク・イベントでは司会を担当しました。

そして、茂田真澄師。この四名のパネリストによって、ベトナムにおけるNGO活動が具体的に報告されていきました。

茂田師は『アーユス』理事長です。師がNGOに関わるようになったのは十年ほど前からです。タイ国境カオイダン難民キャンプを訪れた際、僧侶の身でありながら数万の難民たちを前に何も出来ない己れの無力を痛感し、一方、数多くの人の死を否応なく見つめる中で、初めて本当の信仰への目覚めを実感したといいます。キャンプ内では他宗教の人々がNGO活動に奔走していました。彼らは宗教宗派の違いを越えて互いに協力し合いながら事に当たっていました。そんなありさまを見て茂田師は「これだ」と気づいたのです。茂田師は僧侶として、NGOに積極的に関わっていく決意をします。

それにしても、「これだ」とは、茂田師の中で何が閃いたのでしょうか。むろん茂田師に限ったことではありません。いったい、なぜ多くの僧侶がNGOにたずさわるのか。あるいはなぜ、お寺がNGOの拠点なのか。

NGOはただの善行か

筆者は当初、僧侶とNGO、お寺とNGO、あるいは総じて仏教とNGOといった関連づけに、懐疑の眼差しを禁じ得ませんでした。

以前、僧侶たちが老人福祉について語り合う座談を聞いたことがあります。「仏教者こそが老人福祉に目を向けるべき」といった言葉が安易に交わされていました。仏教者でも何でもない多くの人々が老人福祉の現場で苦闘している今、善行は仏教者の特権だとでも言わんばかりの傲慢な口調は、腹立たしさと共に幻滅を感じさせるものでした。

同様のことが、仏教とNGOとの関連づけにも言えるのではないか。NGOは菩薩行だと言い、僧侶の使命だと言うけれど、果たしてそれは、どれほど切実な思いなのでしょうか。仏教者は善行をするものという固定観念に囚われすぎてはいないでしょうか。仏教者こそが善行をなし得るというある種のエリート意識に縛られてはいないでしょうか。そうした僧侶たちが、安易な思いつきで、いかにも善行らしいNGOに飛びついただけのことにたずさわっている「キンバン青年協会」の支援をおこなっている縁で、このトーク・イベントが催されることとなったのです。

ところで筆者は今、軽率に「縁」という言葉を用いましたが、この「縁」という言葉は重要なキーワードなので覚えておいて下さい。さて、ベトナムが「縁」となって集まった四名のパネリストの顔触れは次の通りです。

ドー・ティー・タン女史。ベトナム女性連盟の農業振興プログラム担当者です。女性連盟は大衆団体として、教育・母子介護・自立性促進といった面を重視しつつ、女性たちの相互扶助と経済的自立を支えています。ベトナム戦争の影響もあって家庭の主要労働力には女性が目立つことから、女性連盟の役割は極めて重要だとのことです。

アリス・アリップ氏。フィリピン人の彼は世界規模のNGO、CIDSE（開発と連帯





ではないでしょうか。いったいそれ以上の、れっきとした根拠はあるのでしょうか。

ところがこうした懐疑は、じつは僧侶たち自身の中にこそくすぶり続けてきたものでした。彼らは自問を繰り返してきたのです。我々のNGOなんて、所詮はただのスタンドプレーにすぎないんじゃないか……。それでもなおかつ彼らはNGOへの取り組みを決意するに至ったのです。なぜか。それは決して思いつきなどではありませんでした。

往々にして葬式仏教と揶揄され、なんだお寺は檀家金融なのかなどと疑われることさえある昨今の風潮の中、悩み、もがき、内省し、そんな繰り返しを経ながら僧侶たちは仏教の原点に立ち返っていきました。気づけばそこに、現代のNGOが重なり合ったのです。NGOの考え方には仏教の教えと見事に通じ合うものがある……。茂田師の「これだ」も、仏教の原点への回帰から生じたのです。

カオイダン難民キャンプ。他宗教の、しかも様々な国の人々が、宗教宗派や国籍民族の違いを越えて互いに協力しつつNGO活動に従事している。「違いを越えて」というNGOのありようが、茂田師の中の仏教の教えと響き合い、「これだ」という気づきが生まれたのだといいます。その仏教の教えは、一言で言えば「縁」ということになるでしょう。

「縁」というキーワード

そう、「縁」なのです。僧侶たちが「地球は生かされ生かし合う縁起の世界」という思いを旨としていることは先にも述べました。様々な面で危機的状況を迎えているこの地球上にあって、すべての「いのち」を育み、お互いを生かし合う縁起の法を説く仏教の自然観・人間観が今まさに求められている、そういう自負こそが、僧侶たちをNGOに駆り立てているのです。

雨森氏の司会でトークは進み、女性対象の無担保貸付プログラムのことがいっそう具体的に語られ、また、女性連盟の役割についても詳しく語られます。ベトナムが対米戦争の後遺症といかに斗ってきたかに関心がある筆者には、これらは興味の尽きない話題でした。でもここではあえて触れずにおきましょう。それより「縁」という言葉に、もう少し深く立ち入ってみようと思います。

「縁」の教えについては、秋田師もある座談会でこんな発言をしています。国際協力を仏教理念で分類すると次の三つになる。知ること、考えること、行動すること。知る＝世界を「縁起」としてとらえること、考える＝宗教者として謙虚に反省すること、行動はその上にある、というのです。

縁起つまり「縁＝条件」と「起＝原因」によって一切のものは生じるというのが仏教の中心思想です。すべては出会い（起）と関係（縁）の中から生じる。出会う両者に優劣はなく、関係は平等です。ところが従来の国際協力は、先進国という優位者が途上国という劣位者に一方的に援助を与えるという形に陥りがちでした。これは平等な縁の関係とは言い難いものです。縁の関係とは、お互いが与え与えられ、生かし生かされる関係をいいます。相手を見つめ己れを見つめ返す、自己発見の生まれる関係をいいます。そのためには顔の見える人間対人間の交流が不可欠です。



国際化社会はこうした交流を核に広がる方向にあり、その最も顕著な様態がNGOです。しかし西欧的な、特に一神教的な価値観によれば、なお関係に優劣をつける傾向を完全にぬぐい去ることができません。単なる援助としてのNGOの限界がそこにあります。

「縁起」あるいは「縁」の思想が、国際化社会の根本原理として求められる時が来たのです。僧侶は今、袈裟を着た職業的善人としてではなく、縁起思想の体現者として、進んでNGOに取り組む根拠を見出しました。出会いの場、自己発見の場、相互理解の場。言葉は簡単ですが、その困難さはこれまでの国際関係史が証しています。仏教は今、縁起の智慧で、この困難を越えようとしているのです。

お寺に人の輪が生まれる

なぜ僧侶がNGOなのか。「縁」という根拠が明確になれば、それは充分に納得できるものです。そこで、この日のトークのテーマであった「ベトナム」について思ってみました。ベトナムと日本は同じ大乗仏教の国だから、「縁」の関係が作りやすかったのかもしれない。またこの国は、アリップ氏が「ディーゼルエンジンのように、かかりは遅いが動きだしたら止まらない」と評したように、大らかさと力強さを兼ね備えた国です。秋田師が「一日一日のいのちをいとおしむ国」と称したように、今日を明日への途中ととらえがちな西欧近代主義とは違う、現在肯定の「自己承認の哲学」というべきものを持った国です。その意味でベトナムは、人間的な縁の結ばれやすい土壌だと言えるかもしれない。そんなふうに思ってみました。

トーク終了後、大蓮寺はささやかな交歓の場に変わりました。一つのプロジェクトを達成した後のスタッフたちの安らぎに似て、ここにも小さなNGOがあるようです。そして、そう、ここはお寺なのです。「お寺はかつてNGOだった」と語った秋田師は、交歓の輪の中にいます。やがて再建される應典院では、ホームステイによる相互交流等のNGOプランも企図しているという秋田師ですが、今ここに「チャオ・ベトナム」というイベントを通じて一つのネットワークができ、しかもここがお寺だということ、それこそ「かつて」から「これからの」へ、お寺がNGOとしてすでに再生しつつある何よりの例証なのだと、そんなふうに思われます。

（女／わたなべ　たけし・作家）

連載・宗教乞食のモノローグ（2）

曼陀羅の箱庭

中谷　加代

私の友達にA君という十歳の少年がいる。彼はお寺に生まれたということもあってか、神仏に対しての気持ちに、ものすごーいものを持っている。A君は箱庭（砂の入った木箱の中に、ミニチュアのおもちゃを使って、自分の世界を表現する。心理療法や能力開発に用いる）を作る時、仏様やマリア様の像をよく使う。

一年も前のことだが、友達と箱庭を作っていて、彼の置いた動物が、友達の兵隊にやっつけられたことがある。友達が帰ったあと、彼は自分の動物をていねいに置き直し、その後ろに仏様を置いて、「護られてるねん」といって帰って行った。

先日も親子箱庭教室に来て、熱心に箱庭を作ってくれた。箱の中央に赤い実のついた一本の木を置き、周りを花で囲み、その外周りを石の十二支の動物で囲んでいた。それら全体を見守るかのように、箱の上部中央にはマリア様が置かれていた。私達が曼陀羅と呼ぶ、心の深い部分の自己を表現した箱庭だ。「木」はバウムテスト（「一本の実のなる木を描いてください」との教示で白い用紙に鉛筆で木を描く心理テスト）でもわかるように、自己の表出である。A君は言った。「花は聖なるもの、石の動物はご先祖様。マリア様が祝福しているんだ」。聞いていたお母さんは、「ファミコンの世界みたいね…」。

それにしても、ご先祖様に囲まれている木という表現の素晴らしさ……なんという確かな自己アイデンティティであることよー　そんな自己の存在そのものをマリア様によって祝福されているA君がいる。

A君の無意識の中で、お父さんは石の十二支の、お母さんはマリア様の姿になっていたのであろうか。私はただもう、すごいなあ…と感嘆するしかない。

A君は、箱庭の中で私に、仏様は護ってくださるんだよ、マリア様は祝福してくださるんだよ、と教えてくれた。ありがとう、またもらっちゃったね。

（なかたに　かよ／カウンセラー）



ぼくたちのお寺 應典院を語ろう

10.26　トークイベント開催さる

"お寺" への熱き思い

10月26日、應典院のお披露目ともいえるイベント、「TALK CONCERT　ぼくたちのお寺　應典院を語ろう」が大蓮寺客殿にて開催されました。

この日のメイン・イベントは「TALK SESSION」。都市の文化シーンで活躍し、秋田住職とも昵懇の仲でいらっしゃるゲストの方々は、音楽プロデューサーの稲本直さん、劇作家の仁王門大五郎さん、国際子ども権利センターの栗本敦子さん、カウンセラーの中谷加代さんの４人。そして司会はイベント・プロデューサーの西島宏さん、劇団維新派の有田亜李子さんのお二人にお願いし、それぞれの方に應典院の持つ可能性について多角的に語っていただきました。

まず初めに、ゲストの方々に自己紹介を兼ねて、それぞれの「お寺」への印象を話していただきました。稲本さんはご専門のクラッシック音楽を取り上げながら、共通点として持つ「お寺」の閉鎖性を指摘。「開かれていない」現状をどう捉えて、今後それをどのように変えていくのか、問題提起されました。

仁王門さんは、学校とは違う場所として寺で学んだり、歌ったりした思い出を紹介すると、栗本さんも幼いころに、寺に存在する時間の流れ方やそこから醸しだされる空気の違いに安心感を感じた、と振り返ります。それを受けて司会の西島さんから、「子ども時代には開かれているのに大人になるとなぜ閉じられるのか」という声があがり、会場にはしきりにうなずく姿が…。

また中谷さんは、寺との関わりが「葬式や法事にお世話になる程度のものだった」としながらも、寺へ行って愚痴を話す、あるお姑さんのエピソードを紹介。「お寺の奥さんは身近なカウンセラーなのでは？」というユニークな見解を示されました。

いきなり鋭い意見がポンポン飛び出したのですが、どなたも「お寺」に対する印象は決して否定的なものではなく、指摘する問題点に、どうやら應典院の持つ可能性とそれに寄せる期待が伺えます。

固定化されたイメージに風を通す

それでは、具体的に應典院への期待はどんなものなのでしょうか。先に西島さんが言う「大人には開かれていない」という問題については、西島さん自身が「仕掛けが必要」と提言。それならば、と舞台で活躍する稲本さん、仁王門さんが自らが「仕掛け」となるべく、それぞれの思いを語られます。

まず仁王門さんは、應典院が収容人員などのハード面だけでなく、「人間のできる可能性を限りなく受け止めうる大きな器」として大きな期待を寄せ、地縁、結縁のみならず、あらゆる人が「凝縮された空間で共有するもの」を大切にする「一期一会」の場として機能することを求められました。

また、クラッシック音楽の固定化されたイメージに反発する形でホール以外の場所でのコンサートを広く手掛けてきた稲本さんは、「應典院には應典院だけのものにこだわってほしい」と提言。「これが一番好きだ、という主催者側の意図に答える形で、私も自分の好きなことを普通にやってみたい」という稲本さんの言葉は、先の仁王門さんの「一期一会」に始まってお互いへの「共鳴」にいたるプロセスとして捉えられるでしょうか。

有田さんも、ご自身の舞台活動を念頭においた上で、「お寺という固定化されたイメージに風を通したい、という秋田住職の言葉に触発された」と話し、「私もそのような“新しい”場所で舞台をやってみたい」と意欲的でした。

一方で中谷さんは、大蓮寺の檀信徒あるいは應典院の会員の意見を常に傾聴する姿勢を忘れてはいけない、と強調。人と人との繋がりの出発点を大切にしていくことは、應典院に与えられた使命でもあることを再確認する思いでした。

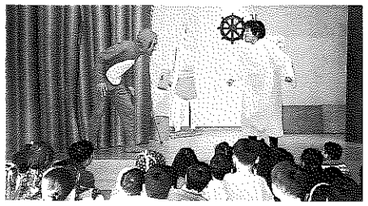
●

今回は、時間の都合で残念ながら参加者の方々のご意見をお聞きすることができませんでした。けれども、この日多数ご参加いただいた檀信徒の方のアンケートに「ゲストの面々を見ながら、應典院がようやく分かりかけてきた」という声があり、秋田住職、そして應典院にとって、何よりも嬉しいお言葉であったことと思われます。

すべてはここから始まる――まさに、そんな実感を持ったイベントでした。

（こいずみ　のぼる／大蓮寺職員）

ライブお寺子どもシアター 15回目の蓮の子劇場



平成５年５月より始まった蓮の子劇場は、蓮美文化研究所と光聖寺さんの共催する、お寺子どもシアター。ほぼ毎月第２土曜に、さんがホールにいっぱいの子どもたちを集め、開催されています。

テレビ、マンガ、ファミコンと、子どもたちを囲む世界は、どれも無機質なメディアばかり。もっとナマの体験にふれてもらおうと、秋田師が中心で企画に取り組み、毎回お芝居、音楽、人形劇や奇術等々、街のアーチストの協力により、楽しい舞台をプレゼントしています。

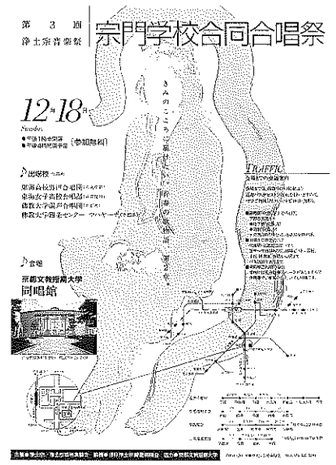
去る12月10日には、蓮の子劇場の常連わたなべたけしとその一座による、お芝居「おさるのしっぽはなぜみじかい」を上演、会場を埋めた80名ほどの子どもたちの喝采を集めました。目の前で俳優さんの熱演に見入る子どもたちの表情は真剣そのもの。汗をかき、声をからしての舞台から、お話し以上にたいせつなものを感じとってくれることでしょう。

地球人として生きる 中田武仁氏講演会に92名

去る９月30日、蓮美文化研究所主催の第５回ロータスカルチャーサロンに、大蓮寺の檀信徒で、国連ボランティア名誉大使の中田武仁氏をお招きし、ご講演いただきました。参加者は92名。

「厚仁の信じたもの　追い求めたもの　そして、残したもの」と題した講演会では、中田氏の日々のボランティア活動の中で得た様々な体験と、その考えをご紹介いただきました。またカンボジアで殉職されたご子息・厚仁氏の人柄やボランティアに目覚められた頃のエピソードが淡々と語られると会場を埋めた参加者の方々には目頭を押さえられる姿も見受けられ、平和への願いを新たにしました。

宗門学校合同合唱祭 涼やかな若人の歌声に感動



昨年12月18日に、京都・宇治市の京都文教短期大学同唱館にて、第３回浄土宗音楽祭が開催、宗門学校の学生たち120名による歌の祭典が繰り広げられました。

これは、浄土宗芸術家協会の創立20周年記念事業として宗門学校合同合唱祭を企画、財団報恩明照会の協賛を得て実現したもので、佛教大学・佛教大学四条センター・東海高校・東海女子高校の４校の合唱団が一堂に会しました。

当日は、成田有恒浄土宗宗務総長、大河内良孝同大学長も来賓として出席、若人たちの涼やかな歌声に聞き入っていました。秋田師は、同協会事務局長として全体をプロデュース、創教出版の応援を得て、無事宗門初のステージを飾ることができました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ルワンダで今なにが‥」 アーユス関西が現地の様子を緊急報告

今世紀最大の難民を生み、ますます混迷を深めるアフリカ・ルワンダ情勢。連日テレビや新聞を通して伝えられる情報は錯綜し、私たちの認識もそれらに左右されがちです。

秋田師が代表を務めるアーユス関西＝仏教国際協力ネットワークでは、ルワンダ難民の救援活動をサポート。この９月には、アーユス事務局長の平山恵さんが現地を訪ね、調査にあたりました。その報告会が、同会の主催で、去る11月28日に創教出版会議室（光聖寺Ｅｄビル）において開かれました。参加者は27名。

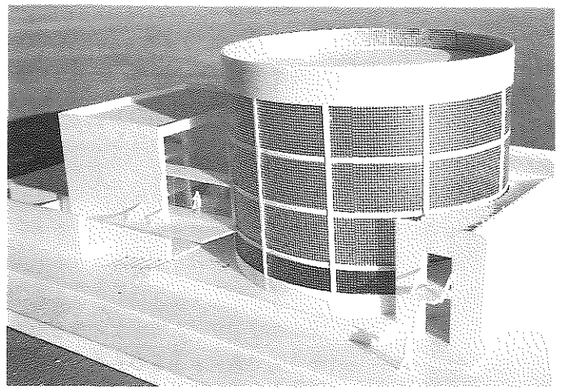
関西在住のアーユス会員は元より、一般の方々にも広く呼びかけられたこの報告会では、報告者・平山さんの詳細な調査資料とスライドの映像を通して、現地の緊迫した様子がリアルに伝えられました。また、物資中心の協力から対話型の協力へどのように転換していくか等、ＮＧＯ活動の現状についてさまざまな問題も提起されました。

質疑応答の場でも、聞き手の雨森孝悦さんを中心に参加者の方々から救援活動への質問が寄せられ、平山さんと同じく東京から駆けつけた同会の大河内秀人さんが、紛争の歴史的背景やＮＧＯ活動の実際について説明されると、参加者の方々は、いっそう熱心に耳を傾けていました。



ウォッチング　應典院

都市寺院・應典院 再建計画のすべて



取材／編集部

去る十月二十八日に、應典院の集いの席上、高口恭行先生から同寺の建築プランについて説明がありました。

秋田住職の意向を十分にくみとっていただき、しかも新しい都市寺院の象徴に相応しい表情を造りだしていただきました。

今回はまず、従来の寺院としての常套を超えるということ、また劇場寺院という新しいコンセプトを実現すること、また、風致地区・都市計画公園予定地区のため建築規制も多いなど、当初から克服しなくてはならない条件が数多くありました。都心の下寺町という独特の立地も、重要な課題のひとつ。生魂の緑をどう取り入れるか、また周囲の寺町とどう溶け合うか、単体の建物としてだけでなく、環境条件を最大限に考慮した建築となっています。

ここでは、先般公表された内容をもとに、現在一番新しい應典院の建築プランについてご紹介しましょう。

楕円形の本堂ホール

應典院の基本的な形は、楕円筒の本堂と直方体のラウンジ、立方体のオフィス棟の三部分から成っています（上写真）。楕円筒の本堂は、隅と角のない空間でそこに入る人に、非日常的なひとつの世界＝浄土を連想させます。應典院の最大の特徴は、この本堂がメインホールを兼ねているということ。約五十坪の広さを持ち、天井高も九mあって、垂直に見上げるような視野が確保できます。

内部は平土間になっており、椅子席もレイアウトフリー。催しの内容に従って自由に会場を設定することができます。（図A）本格的な音響・照明設備も備え、演劇やコンサート、ギャラリーとしても活用できます。着席で百二十人程度の収容が可能。

またホール下には、多目的ルームがあり、こちらは集会室として利用していただけます。研修会や小さな学習会、また定期的なカウンセリングの教室もオープンの予定です。

杜を見渡すロビー

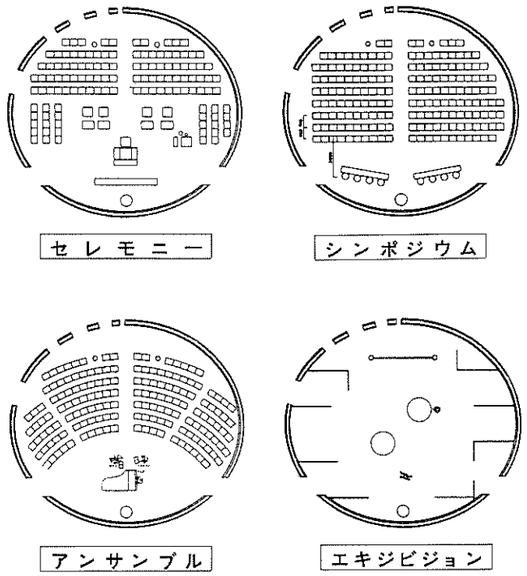
今度は外から應典院を眺めてみます。建物西側（松屋町筋）の壁は取り払い、往来からも自由に行き来できるようになります。

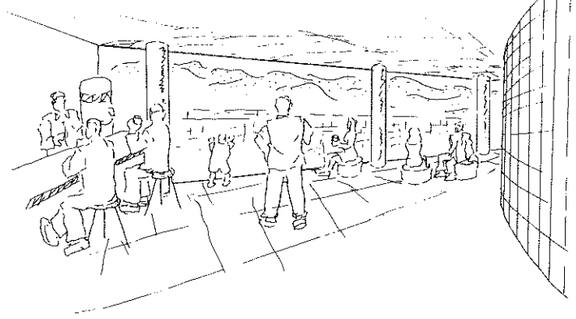
まず低い階段を上って入ると、エントランスロビーが。中央には地蔵尊が祀ってあります。ここはイベント時の待合空間で、接客や受付業務が行われます。そして、ロビーから正面階段を上がると、後方部分がオフィス棟、前方部分がラウンジに分かれます。オフィス棟は、小スペースに分かれており、教化・寺務部署に当てられます。

前方のラウンジは、約二十五坪のくつろぎ空間。東側（墓域）に向かってひろびろとガラス窓が開け、向こうには鬱蒼とした生魂の杜が。まさに寺町の持つ特異性を存分に物語る快適なスペースとなります（図B）。簡単なコーヒーカウンターもあり、法要やイベント時の休憩空間としても利用できます。

もうひとつ、欠かせないのが建物の夜景。下寺町界隈は、夜は明かりが乏しく寂しい雰囲気がありますが、これを應典院の夜間照明で克服。本堂ホールやオフィス棟などから「見せる明かり」がこぼれ、夜、人の集まりやすいイメージを演出します。幹線道路の松屋町筋は、夜も交通量の多い往来ですから、都心の新しいランドマークとして必ず注目を集めることでしょう。

A　ホール　配置バリエーション



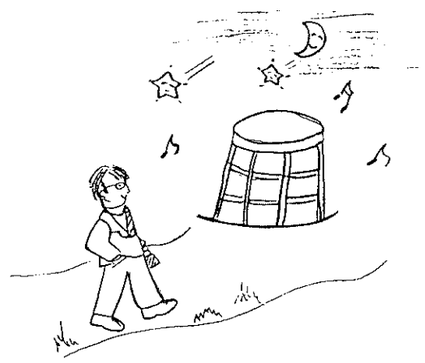


B

シュミレーション・ストーリー

都心の新しい学習空間 應典院で学ぶH氏の体験

もし、ボランティア活動に励む服部さん（仮名・四十二歳・販売会社勤務）が、應典院のイベントに参加したとしたら。服部さんのレポートを読みながら、應典院のイメージを描いてください。



「梅田の会社を出たのが、夜六時前。地下鉄に乗って谷町九丁目下車。千日前通りの大きな坂道を降りて、應典院へ向かう。今日は、社会人中心の〈関西ボランティアセミナー〉がある日。われわれ勤め人にとって、夜の集まりはとても貴重だ」

「あたりはすっかり暗いが、下寺町の交差点から、應典院は一目で分かる。やわらかい光が往来を照らし、ほっとする雰囲気。昔からお寺は入りにくいものだと思っていたが、ここは吸い込まれるような感じだ」

●

「エントランスに入ると、ダンガリー・シャツを着た應典院スタッフの山田さんのすてきな笑顔に迎えられる。受付名簿を見ると、もう先客が三十人も。同じサラリーマン同士、時間をやりくりして、セミナーに参加しようとする心意気には感服する。受付のカウンターには、最近のボランティア関係の情報誌や書籍が並べてあったので、手頃なものを二～三購入する」

「開場まで十分ほどあるので、二階のラウンジで熱いコーヒーを飲む。大きなガラス窓からは広大な墓地と杜が見渡せる。バックにはうっすらとアジア音楽のBGMが流れ、ほっと落ちつくことができる。前の日曜日は昼間、ここで子どもたちを集め、〈かたりべの会〉があった。親子同伴で参加したが、都市の中のこういう場所で、民話や説話を聞く体験はよかった。ここは、とても精神的な空間だ」

「六時半からセミナーが始まる。会場は半分ほど埋まった感じ。お香の匂いが漂い、正面にはご本尊がいらっしゃる。いつも通り合掌する。仏さまに見守られてボランティアを勉強できることは、應典院ならではのことで、すばらしい。開会前にスタッフの田中氏から、来月應典院で開催される〈ベトナム音楽祭〉の動員協力お願いがあった。われわれセミナーの会員もこのイベントには全面協力している。同じアジアの仏教徒同士、ともに仕事ができることは有意義なことだと思う」

●

「セミナー終了は九時を回っていたが、ロビーで仲間の会員と次回の予定について話し合う。次回は役員だけの会議なので、二階の研修室を借りることにする。山田さんに聞くと、スケジュールOKとのこと。早速申込み手続をとる。

ロビーには、われわれ以外に若い学生たちの集団が。訊ねると、明後日から本堂ホールで、芝居の公演をうつスタッフだった。『がんばれよ』と声をかけ、外へ出る。夜の冷気は、心地よい。また、自分の取り組みが應典院で実現できつつあることも、本当に幸いだと思う。

仲間から少し寄っていこうかと誘われると、急に腹が泣いた」

（人名はすべて仮名です）